

ひだかの魅力 再・発・見

このコーナーでは、市民のかたに日高の魅力（人・団体・風景・もよおしなど）について語っていただきます。

こうしゅういん 高萩院



おぐろ
小黑健次郎さん（高萩）

武蔵高萩駅ができる前、この一帯には大きなお寺がありました。読み書きそろばんでも知られる、寺小屋の時代もあつたんです。

駒形山弥勒寺と呼ばれた高萩院、その場所は、ほぼ現在の武蔵高萩駅のさくら口付近にありました。高萩院は、長寛二年（一一六四）から七百有余年、幾多の変遷を経て、明治元年（一八六八）神仏分離令により廃寺となりました。

その伽藍（寺）は、明治に入ると寺小屋となり勉学の間としての役割を担っていました。

昭和に入り、日中戦争勃発直前、軍事路線としての川越線の中佐が高萩院の屋根の上に立つて、わたしの叔母である管理人に「ここがこれからできる武蔵高萩駅の中心になるので、立ち退いてもらいます」との申し告げを行いました。当時は御上の一方的命令が罷り通る時代、幸いそれを聞いた坂戸の米穀商のかたが、駅開設により南北に分断される高萩院を、土地の管理を含め、立ち退き移転等を全面的にバックアップしてくれました。この人はわたしの小学校時代の命の恩人でもあり、当時を想うと今でも感謝の念が込み上げてきます。

現在、高萩院跡地の池には、寺小屋時代の恩師の功績を残すため、子弟のみなさんが建てた筆塚の顕彰碑が残っています。



今も残る高萩院の池

わが家の あいど 愛撮る

お子さんの写真を「広報ひだか」担当までお寄せください。写真は掲載後、お返しします。

編集室

例年、秋分の日の中着田の曼珠沙華が見ごろを迎えます。

中着田の曼珠沙華の見どころは百万本とも言われる圧倒的な数にあると思います。まさに赤いじゅうたんを敷き詰めたようだと形容するにふさわしいものです。日中の赤い群生は、大迫力ですが、朝夕には、えも言われぬ幻想的な世界がひろがります。一方、道端に数本咲いている曼珠沙華は、どこか寂しくひっそりとした印象を受けます。同じ花でも咲いている場所や数によって別の顔を見せてくれる花です。

この時期に中着田を訪れたことのない人はもとより、何度か訪れたことのある人も、秋の一日、ぜひこの絶景に足を運んでみてはいかがでしょうか。天候によって開花時期が早くなったり、遅くなったりすることがありますから開花状況には注意してください。（A）

人口と世帯	[8月1日現在]		
	人口	56,082人(前月比+100人)	(男 28,091人・女 27,991人)
火災と救急	世帯数	20,850世帯	
	[日高市内]		
	7月	累計	
火災	2件	15件	
救急	177件	1,151件	